

短歌への誘い 鳥の歌

コロナコロナの二〇二〇年も、あと少しで終わりますね。来年は、飛翔できますように、鳥の歌を選んでみました。

夜をこめて鳥のそら音はかるとも

世に逢坂の関はゆるさじ 清少納言

昨夜そそくさと帰られたのは、宮中にご用とのことでしたのに、なんですか、鳥が啼いたからとか？夜も明けられないのに鳥の啼き真似で、函谷関を開けさせた孟嘗君の家来のような、声色上手でもいたのですか？それもまあ、函谷関どころか、逢坂の関を越えたいなどとおっしゃる。いくらあなたも、真夜中の空啼きで騙そうとなさっても、男と女の恋の関所を、やすやすと開け渡すような、そんな私だと思いませんか？

清少納言は、紫式部と並び称される、平安時代を代表する才女。ご存知、随筆文学「枕草子」の作者である。橘則光と結婚してから、一条天皇の中宮定子の女房となった。定子は彰子の恋敵とも言うべき存在だったから、彰子に仕える紫式部との対立が、余計、誇張されて噂されたのだろう。定子の崩御後、再婚したが、晩年は不明である。

淡路島かよふ千鳥のなく声に

幾夜ねざめぬ須磨の関守 源兼昌

あかつきごとに、須磨の浦から淡路島へと、海を渡っていく千鳥の群れの、啼き交わす声が寒空に響く。板ひさしも傾いた須磨の関所の、寂しい番屋を守る男は、幾夜眠りを覚まされて、物悲しく人恋しく、耳をそばだてたことだろう。

生没年不詳。官位もあまり高くなかった。

いくつかの歌合に出席した記録はあるが、歌人としての目だった活躍は伝えられていない。この歌は「関路千鳥」という題詠で、実際に兼昌が関守だったわけではない。また「友千鳥もろごゑに鳴くあかつきはひとりねざめのともたのもし」という「源氏物語」の中の歌を踏まえている。

(ミニコミ W・S)

太子堂の民話

「太子堂橋の子づれキツネ」

「いたぞ、いたぞ」

大勢の村人の集まる前で、逃げ場を失った子づれのキツネが、キョトンとしています。

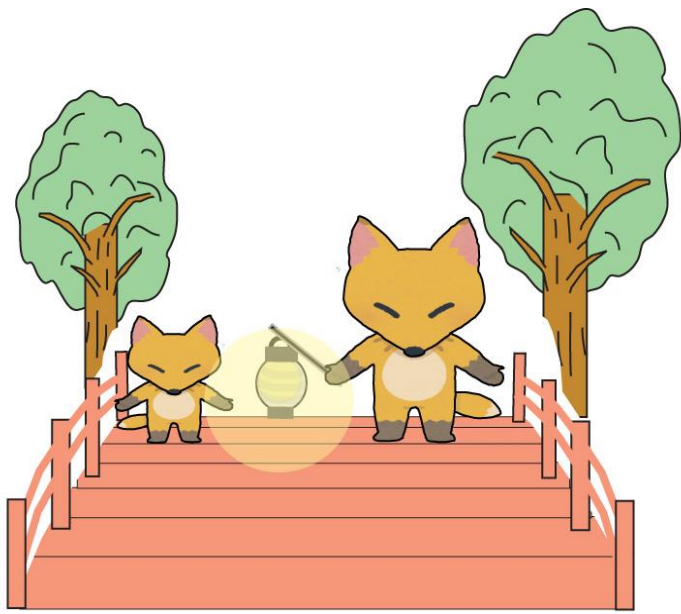
じつはきょうは、名主のいいつけで、村をあげてのキツネ狩りの日だったので、村人たちは声をはりあげ、鳴り物をならして、キツネのいそうな土器塚や、上原あたりの、やぶをかき分けて探し回り、ようやくキツネのすみかを見つけたのでした。

でも、その後村人たちは、誰一人としてこの親子のキツネをつかまえようとはしません。口に出さないまでも、みんな後れたりをおそれているのでした。

村人は名主がいらないのをさいわいに、そのまま帰ってしまおうとする者もいました。「かわいそうだ、逃がしてしまおう」と言うことになって、今度は追いはらうまねをしました。親ギツネは子ギツネをかばって、立ちすくむばかりで、逃げようとしません。

その内に、村人は一人去り、二人去りして、みんな円泉寺へ引き上げてしまいました。名主がようすを見に来た時には、もう

親子ギツネも村人も、だれもいませんでした。でも、その日から、太子堂村では、キツネにばかされたり、田畑を荒らされることがなくなりました。そればかりか、暗い夜にはどこからともなく、親ギツネと子ギツネがちょうちんを持ってあらわれ、太子堂橋を渡ろうとする村人の足もとを照らし、行く道をしばらく案内してくれた後、どこかへ消え去るのでした。



親子ギツネの親切は、この後いつまでも続きました。

「きつと、いつかのキツネたちが、恩返しをしているにちがいない」

村人は、みなそう思いました。こうして、太子堂の村は、親子のキツネに守られて、女や子供でも夜道を安心して歩けるようになり、しあわせになりました。

※この民話「太子堂橋の子づれキツネ」は、「世田谷区生活文化部文化・国際・男女共同参画課が

編集し平成六年三月に発行した「ふるさと世田谷を語る」に掲載されたものです。なお、イラスト部分は原本とは別に、ミニコミ紙編集委員会にて作成したものです。

お知らせ

一・本年三月十五日付で発行いたしました、本紙第七十五号第一面で、「東京オリムピック聖火リレーの最終ランナーを予想しよう」という記事を掲載しましたが、オリムピックの延期に伴い、本件は中止とさせて頂きました。

二・本年七月十五日付で発行予定の、本紙第七十六号は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため休刊に致しました。

〈行事報告〉

- 10月25日 古着・古布回収 (8,445 kg回収)
- 11月08日 太子堂中学校避難所運営訓練(太子堂中学校)

〈行事予定〉

- 1月16日 防災講演会 三茶しゃれなあど(スワン・ビーナス)
- 2月07日 第36回太子堂子どもマラソン大会(太子堂小学校)
- 2月28日 太子堂地区合同防災訓練(太子堂小学校)

※本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、多数の行事が中止になっております。